

教材開発に向けた西・英語の軽動詞に関する対照研究

—コロケーションという観点から—

**Estudio comparativo de verbos de apoyo en español e inglés centrado
en sus colocaciones para la creación de material docente**

葛原亮 (Ryo TSUTAHARA)

スペイン語と英語の軽動詞の体系には、様々な類似点が観察される。いずれの言語でも、動作の実行を表す動詞 (*hacer/do*) だけでなく、譲渡を表す動詞 (*dar/give*)、所有を表す動詞 (*tener/have*)、取り込む動作を表す動詞 (*tomar/take*) が軽動詞として使用される。スペイン語の軽動詞を指導する際に、この英語との平行性を学習者に提示することで理解を効率化することができるだろう。しかし、当然ながら、上記のペアの間には差異があることも予測される。スペイン語の軽動詞を英語と対照させながら指導するのであれば、各ペア内の差異を十分に把握しておく必要がある。そこで本研究では上記の両言語における軽動詞のペアのコロケーション上の類似点と差異、つまり、それぞれの動詞がどのような名詞を目的語とし、どのような名詞を目的語としえないのかを明らかにする。この研究は英語の知識を前提としたコロケーション教材作成に向けたものである。

本研究ではまず、問題とするそれぞれの言語における軽動詞と強く結びついた名詞をコーパス (European Spanish Web 2011, British Web Corpus)、並びにコロケーション辞書 (REDES, Oxford Collocation Dictionary for Students of English) から抽出した。その後、得られた「軽動詞 + 名詞」コロケーションについて、それらがもう一方の言語で、どのコロケーション、表現に対応しているのかを記述していった。

Tener/have, tomar/take ペア間では高いコロケーション上の類似性が観察された一方で、*hacer* によるコロケーションと *do* によるコロケーション、ならびに、*dar* のコロケーション、*give* コロケーションの間には対応関係が観察されないケースがより多く。こうしたズレの多くは、*hacer* には *realizar, ejercer, efectuar*、*dar* には *brindar, impartir* といった、類似する機能を有した動詞、いわば、「同義的な広義の軽動詞」が存在する一方で、*do, give* にはそうした競合する動詞が存在しないことから生じている。本発表ではこれらの広義の軽動詞によるコロケーションも現代スペイン語では高い頻度で使用されていることを指摘し、それぞれの特性、重要性を主張する。

de ahí que 節の叙法選択について
Sobre la selección modal en la oración *de ahí que*

福嶋教隆 (Noritaka FUKUSHIMA)

luego que, así que, conque, por eso, por consiguiente などが導く結果表現は、直説法をとるのが通例である。ところが *de ahí que*, *de aquí que*, *de allí que* という語句に導かれる節・文形式（これらを *de ahí que* 節と総称することにする）は、結果表現でありながら、接続法をとることが多く、この用法は「伝統的に変則的 (anómalo) とみなされてきた」(Bosque, I. *et al.*, coords, *Gramática descriptiva de la lengua española*, 1999, p.3297) と言われている。

本発表では、Real Academia Española の電子コーパス Corpus Referencial del Español Actual などを利用して、次のことを明らかにする。

1. *de ahí que* 節の直説法・接続法選択の実態（接続法だけでなく、直説法の使用もかなりの比率で認められる。スペインよりラテンアメリカのほうが直説法の使用率が高い、など）。
2. *de ahí que* 節の叙法選択の原理（できごとの結果を主たる情報として伝えたいときは直説法が選ばれ、原因を主たる情報として伝えたいときは接続法が選ばれる）。当然ながら、この原理はその他の用法における叙法選択の原理と矛盾しない。
3. 従来の説 (Real Academia Española *et al.*, *Nueva gramática de la lengua española*, 2009 など) の問題の指摘と改善の提案（「*de ahí* と *que* の間に *deducir*, *implicar* などの動詞が含意されている」という説の難点。*de allí que* という形式への言及がなかったが、実際にはラテンアメリカでよく使われていること）。

この問題について発表者はかつて「*de ahí que* 構文について」(『神戸外大論叢』44:6, pp.1-22, 1993) として考えを報告したことがあるが、その後、他の研究者による分析が進み、また、電子コーパスの発展により資料収集が飛躍的に容易になったため、あらためて問い直してみようとするものである。

有声閉鎖音音素 /y/, /w/

Fonemas oclusivos sonoros /y/ y /w/

木村琢也 (KIMURA, Takuya)

1.1 スペイン語の音素 /b/, /d/, /g/ の非閉鎖音異音は、伝統的には Navarro Tomás (1918), Quilis (1993) に代表されるように摩擦音と説明されてきたが、今世紀になって Hualde (2005), Hualde *et al.* (2010), Martínez Celdrán *et al.* (2003, 2013), Real Academia Española *et al.* (2011) など多くの著作で接近音であると主張されている。しかし実際には摩擦音と接近音の両方の異音が存在することを示す次のような根拠がある。(1) これらの音素が摩擦音で実現されている音声の録音が存在する。(2) 発表者が2014年11月にスペインのサラマンカで行った知覚実験の結果がそれを裏付けている。

1.2 上記(2)の実験について説明する。被験者はスペイン語母語話者50名。発表者が *cava*, *cada*, *pago* という語の /b/, /d/, /g/ をそれぞれ閉鎖音、摩擦音、接近音で発音した録音音声 を被験者に聴かせ、どの程度に良い発音であるかを主観評価してもらった。その結果、どの発音も比較的高い評価を得たが、比較すると /b/, /d/, /g/ のすべてにおいて摩擦音 > 閉鎖音 > 接近音という序列になった。

2. 上記実験と同時に実施した /y/ の異音に関する実験で、*lleno*, *calle* という語の /y/ をそれぞれ7種類の異音で発音した音声について同様に主観評価してもらった。その結果、調音位置が硬口蓋である限り、調音様式が破擦音、摩擦音、接近音のいずれであっても高い評価を得た。/b/, /d/, /g/ と平行した現象である。/y/ の場合に閉鎖音でなく破擦音になるのは、硬口蓋閉鎖音は破擦化しやすいという一般音声学的傾向によると考えられる。

3. 現代スペイン語の子音体系の著しい特徴のひとつは、有声摩擦音系列が完全に欠落していることである。これは音声としての有声摩擦音が有声閉鎖音音素 /b/, /d/, /g/ の異音と見なされるからであるが、いわゆる半母音音素 /y/, /w/ が音節頭に位置した場合も閉鎖音、破擦音、摩擦音、接近音のすべての異音が許容されるという点で /b/, /d/, /g/ に類似している。このようにスペイン語の非鼻音・非側面音・有声子音音素 /b/, /d/, /g/, /y/, /w/ はその異音の範囲に関して互いに類似しており、前3者を有声閉鎖音音素と呼ぶならば、後2者も同じ呼称で呼ぶこともあながち無理ではない。

**Distribución de la variación de la segunda persona singular del
pretérito de indicativo en Twitter: *compraste* vs. *comprastes***
ツイッター上の直説法単純完了過去の二人称単数の変異の分布について
— *compraste* vs. *comprastes*

Antonio RUIZ TINOCO

El uso de la forma no canónica de la segunda persona del pretérito de indicativo terminada en /-s/ como *comprastes*, *hablastes*, etc. es un fenómeno de variación bastante extendido, sobre el que existen abundantes estudios de usos en casi todos los países hispanohablantes, como Charles E. Kany, John Lipski, Adolfo Elizaincín, María Vaquero, etc. En general, se considera una forma desprestigiada, estigmatizada y rural.

La mayoría de los estudios de este fenómeno se han basado en el español hablado. En este estudio, se analiza la distribución de su uso en una muestra de verbos en los microblogs de *Twitter*, a partir de un macrocorpus de tuits geolocalizados procedentes de todas las zonas hispanohablantes. Además, para centrarnos en el uso actual solamente consideramos los datos de los años 2016 y 2017.

Al comparar las ocurrencias de las formas canónicas y no canónicas encontramos que hay una diferencia de frecuencia de uso que no se puede atribuir solamente a la percepción por parte del hablante de una analogía con la segunda persona de otros tiempos verbales.

Los datos están recopilados en bases de datos relacionales MySQL y también en una base de datos no relacionales, Elastic Stack.

Para la preparación de los respectivos mapas de distribución y visualizar los resultados de los análisis se ha usado QGIS, software de código abierto y el módulo Kibana de Elastic Stack.

El corpus así formado nos permite comparar el uso de tales formas en los mismos períodos de tiempo de zonas distantes, lo que no habría sido posible por medio de los métodos tradicionales de recolección de datos, por lo que de esta forma nos permite observar el fenómeno con distintas perspectivas.

カルメン・マルティン・ガイテと言葉

Carmen Martín Gaité y palabras

仲町知帆 (Chiho NAKAMACHI)

本発表では、2011年に神戸市外国語大学に提出した同タイトルの博士論文に基づき、カルメン・マルティン・ガイテ(1925-2000)にとって、言葉とはどのようなものであったかを再考する。書くことは話すことの代替手段に過ぎない。書くことに頼らず話すことによって意思疎通が十分にできたならば、そもそも書物など必要なかったはずだ。というのが、小説家としての道を選び取った彼女の言い分である。

小説『長話』では、言葉と正面から向き合うことの大切さや、書かれた文字に対して、話し言葉の持つ絶大な癒しの力について伝えている。『晴れたり曇ったり』においては、言葉を神秘と儂さと美を象徴する蝶のように捉え、その特徴を独自の視点から描き出した。『雪の女王』では、言葉が記憶を繋ぎ止め、また蘇らせるのに欠かせないものであるとし、過去の作家たちの残した言葉についても思いを巡らせている。『生きることの不思議』では、主人公は人生について言葉というそれ自体不思議で不完全な力でもって追求しようとするが、結局どこにもたどり着かない。幸せの秘訣は固執しないことにあるとし、不思議なことや神秘性に対してあえて介入せず、遠くから静かに眺めるにとどめる。この姿勢は、蝶をつかまえて神秘の根源を探ろうとするものの、しばらく愛でてから再び解き放つような、まさに彼女の言葉に対する態度に通じる。以上のような作品を通して、彼女の言葉への信頼とそれにかける願いを明らかにし、言葉の価値について今一度考えてみたい。

クラリンと黄金世紀文学 — 『ラ・レヘンタ』を中心に—
Clarín y la literatura del Siglo de Oro — En torno a “La Regenta

徳永麻子 (Asako TOKUNAGA)

レオポルド・アラス<クラリン> (Leopoldo Alas, <Clarín>, 1852-1901) の代表作である長編小説『ラ・レヘンタ』 (*La Regenta*) 研究は多岐に渡るが、登場人物の形成および分析に関しては、今日に至るまで主人公アナ・オソーレスやフェルミン・デ・パス司祭を中心に扱われてきたと言えるだろう。特にアナ・オソーレスとボヴァリズムの関連性は繰り返し述べられて来た。

ペレス・ガルドスは『ラ・レヘンタ』第二版出版の際に寄稿した序文の中で、主要登場人物の一人であるドン・ビクトル・キンタナールを「カルデロンの登場人物」として紹介した。黄金世紀演劇に傾倒し、物語前半において顕著である時代錯誤な名誉の憧れと姦通に対する懲罰の強固な意志は、妻の不貞を目前にして揺らぎ、作者が担わせた「カルデロニズム」を自ら打ち捨てて命を落とす。地方都市ベツスタの現実と理想の差異に抗い敗北したアナ・オソーレスと同様に、ビクトル・キンタナールもまたロマン主義を追求した結果裏切られた人物であると読み解くことができるだろう。アナの言動に散見するボヴァリズム的要素と、それに相反するビクトル・キンタナールの「カルデロニズム」は、互いに静かな軋轢を生じ、共に現実の前に敗北するという結末を迎える。

本発表では、カルデロンの登場人物ビクトル・キンタナールと、作中にみられる黄金世紀的名誉について考察を行う。

カルロス・フエンテス『アルテミオ・クルスの死』における全体性の構築
Totalidad en *La muerte de Artemio Cruz* de Carlos Fuentes

西條 万里那 (Marina SAIJO)

カルロス・フエンテスの長篇小説『アルテミオ・クルスの死』(1962)では、メキシコ革命後の動乱に乗じて財を成し、経政済界の大立者となった人物、アルテミオ・クルスの人生が描かれる。しかし、本作品の構成は、主人公の生涯が時系列順に語られる単純な伝記小説のそれとは一線を画している。この小説では、ふたつの異なる時間が流れている。ひとつは、病床のアルテミオが生きる現在、もうひとつは、この人物の胸中で断片的に再生される過去である。クルスの内と外に流れるふたつの時間は、語りの人称と動詞時制の巧みな使い分けによって提示されている。一人称単数形の断章では、死を目前にした主人公の内的独白が現在時制で伝えられる。二人称単数形の断章では、過去の出来事が未来時制で語られることにより、まだ選ばれていない可能性として提示される。そして、三人称単数形の語りは、実際に主人公が経てきた記憶を過去時制で明らかにする。

本発表では、この小説を特徴づける語りに注目し、どのような原理に基づいて物語が構成されているかを明らかにしたい。アルテミオは、目の前の現実に対する問いかけとして、記憶を辿り、過去のある時点において別の可能性を選択すること、すなわち、ありえたかもしれない別の現実が実現することを想像する。主人公が実際に生きてきた過去が示される過程で、アルテミオの選択による犠牲の存在も浮かび上がる。本作品の複合的な語りには、アルテミオが選び取ったものだけでなく、切り捨てたものもまた同時に読者へ提示する意図があること、そして、それがアルテミオというひとりの人物を余すところなく捉えようとする作家の試みであることを説明する。

コルタサル初期短編における観察者 —“Bestiario” と “Axolotl” を中心に—

**El observador en los primeros cuentos de Julio Cortázar:
"Bestiario" y "Axolotl"**

辻さやか (Sayaka TSUJI)

フリオ・コルタサル (Julio Cortázar 1914-1984) によって最初に出版された短編集の表題作“Bestiario”と、二番目に発表された“Axolotl”(Final del juego 所収)の二作品には、異なる状況ながら、語り手あるいは主人公がある対象を熱心に観察している場面が描かれている。コルタサルの作品には、登場人物が対象を観察している構図のものがしばしばみられる。

本発表では、コルタサルの特に初期のものであるこの二作品について、主人公と語り手がどのように対象を観察しているのかという観点から物語を分析する。

コルタサルは幻想的な作品を描く作家と言われ、“Bestiario”と“Axolotl”はそうした「幻想的」作品としてしばしば論じられてきた。コルタサルは、1983年のワイス(Jason Weiss)によるインタビューの中で、晩年出版された短編集の作品について質問された際、幻想と現実(と呼ばれるもの)が同一であるかのように描かれているということを認め、それに比べ初期の作品では、そうした幻想と現実との乖離は後期の作品より大きいものであったと語っている。またその一方で、複数のエッセイなどにおいて、ごく幼いころから周りの人たちは幻想的なものに対する認識が異なっていたと述べ、また自分にとって幻想とは自然なものであり、同級生たちが考える現実とは異なる現実を受け入れていたのだということも繰り返して主張している。物語を分析するうえで、コルタサル自身の現実なるものの捉え方、またその創作における姿勢をふまえ、観察する行為から導かれるものについて明らかにしたい。

¿Cómo actuamos los docentes en el escenario educativo de las tecnologías de la información y la comunicación?

教育 ICT 環境において教師は如何にふるまうか？

Panelistas: Analía VITALE ROSENBROCK

Masami OGAWA

Cecilia SILVA

Midori TERAO

Las tecnologías de la información y la comunicación (TICs) están inmersas en nuestra cotidianeidad y representan una fuente inagotable de recursos para la educación, incluida la enseñanza de lenguas. Frente a estos nuevos recursos digitales, ¿cómo piensan los docentes sobre estas nuevas tecnologías y su propia formación, la aplicación concreta en el aula y en sus lugares de trabajo? Esta presentación versará sobre estos temas, desarrollada en dos partes.

En la primera parte, la profesora Vitale presentará de los resultados de una encuesta que se realizó a fines del año pasado a los profesores de español sobre el uso de las TICs por parte del alumnado. La muestra consistió en 50 profesores (22 nativos japoneses y 28 nativos de español) de los cuales la mayoría tiene más de 11 años de experiencia docente (77%). Los resultados de la encuesta mostraron que una mitad de los docentes cree que las TICs son convenientes para la enseñanza a veces. Los profesores señalan que sus desafíos son por un lado, sus lugares de trabajo, como por ejemplo, con las limitaciones materiales y técnicas. Por otro lado, otros creen que las TICs son una fuente de distracción para los estudiantes o promueven un mal uso de los recursos en línea. Frente a la pregunta por su propio aprendizaje de las TICs, casi una absoluta mayoría de los profesores está muy interesada en formarse, declara que le abruma la velocidad con que aparecen nuevos recursos y herramientas, y por lo tanto tampoco puede evaluar concretamente su potencial educativo.

En la segunda parte, las profesoras Ogawa, Silva y Terao expondrán sobre sus experiencias en relación a los siguientes puntos: 1) su propio aprendizaje en el uso de las TICs, 2) las políticas, reglas generales y/o límites institucionales de las clases de español,

3) la aplicación concreta en el aula de español y el resultado entre los estudiantes. Sobre este último punto, la ponencia de la profesora Ogawa se desarrollará a lo largo de los siguientes aspectos: manejo de los estudiantes de aplicaciones (Word, Excel y Power Point) para realizar sus tareas, uso de la computadora en el aula por parte de la docente, y utilización de las plataformas que ofrecen las universidades. Se realizará una reflexión a partir de los resultados de las encuestas a los estudiantes, y de los argumentos de D. A. Norman (2013), quien señala adónde deberíamos dirigirnos sobre las mejores maneras de utilizar las tecnologías. La profesora Silva se va a referir a un portafolio de trabajos de comunicación oral como un recurso que permite a los estudiantes evaluar los resultados de un semestre y reflexionar sobre ellos. Esta presentación contiene tres partes: descripción del portafolio, resultados del proyecto en términos de los logros de los estudiantes y la definición de sus propias estrategias de aprendizaje, integración de la evaluación y reflexión de los estudiantes al proceso de aprendizaje. Finalmente la profesora Terao nos contará sobre las actividades tanto en el instituto como en la universidad. Se propone el uso del teléfono móvil e Internet para las prácticas orales y hacia el final del semestre, con las presentaciones de los estudiantes. Seguidamente, se evalúa la reacción de los estudiantes, su efecto en el aprendizaje y las dificultades que trajo aparejadas el uso de las TICs. Al final, propondrá de qué manera podrían superarse estos obstáculos para futuras prácticas pedagógicas.

Norman, D. (2013) *The Design of Everyday Things: Revised & Expanded Edition*. New York, Basic Books.

スペイン語教育に質的変化をもたらすための ICT 利用

**Las TIC para producir un cambio cualitativo
en cursos universitarios de ELE**

塚原信行 (Nobuyuki TSUKAHARA)

京都大学では、2016年度から、初修外国語としてのスペイン語教育の目的を「カルチュラル・インテリジェンスの養成」と定めている。「カルチュラル・インテリジェンス」は、文化的相違を超えて円滑なコミュニケーションを図る能力を意味し、就業を強く意識している点と、理解した結果としての産出行為に焦点を置く点が、従来から言われている異文化理解能力との主要な違いと考えられる。様々な制約がある初修外国語としてのスペイン語教育の枠内において、どうしたらこの目的を達成できるのかという問いに対する答えとして、日々の教育活動における PDCA サイクルの中から浮かび上がってきたのは、①目的に適した教科書の利用、②効果的なコースマネジメントの実現、③学習内容と実世界との結合、④学ぶ技法の習得、という4点である。2016年度から運用している学習ポータルサイト (<https://esp-kyoto-u.com>) は、これらニーズをワンストップで満たす媒体として機能しつつある。学習ポータルサイト上で実現されている、4つのニーズに対応する方策は、①紙の教科書を廃止し、ウェブサイト形式に移行、②教員グループウェアとしての機能、③関連情報の集約・提供、④サイト上での課題実施とフィードバック (学習プロセスの意識化)、である。報告では、上述の目的を定めるに至った背景、学習ポータルサイト運営方法や技術的概要、実現された方策の長所・短所などに触れながら、ICT 利用が大学スペイン語教育にもたらしうる質的な変化について考察する。

Reflexiones sobre el modo de estudiar. Saber aprender y hacerse entender.

学び方についての考察。各個人が効果的な学習法で学ぶ。
教員が効率的な学び方を授けること。

Arsenio SANZ RIVERA

Desde los años ochenta, la teoría metacognitiva ha venido adquiriendo gran relevancia en el ámbito educativo y para los partidarios de esta corriente, supone una revolución en el mundo de la enseñanza. Actualmente, algunos autores consideran que los presupuestos teóricos derivados de la metacognición, se convierten en un planteamiento didáctico que debe servir como valioso referente para la creación de los programas de estudio (Javier Burón, 1988; Beltrán, J. 1987; Geva, E. 1985) No obstante, aunque reconocemos los esfuerzos y aportaciones que el metacognitismo ha realizado para poder interpretar los procesos mentales del individuo durante el aprendizaje, podemos afirmar que algunos de sus presupuestos teóricos resultan difíciles de interpretar y excesivamente complicados para llevarlos a la práctica diaria de nuestras aulas. (*“predecir conclusiones”*, en Baker, 1985b; Samuels, 1984, *“organizar macroestructuras”* Burón, 1988). Consideramos que la mejor opción pasa por reconocer y ser conscientes del papel de los procesos mentales que acompañan al acto de aprendizaje y plantear en las aulas, modelos prácticos y de fácil aplicación que ayuden a los estudiantes a aprender y a los enseñantes, a hacerse entender.

En el trabajo que presentamos, basamos nuestros datos y conclusiones en los resultados obtenidos desde el curso 2015~2016, con estudiantes de tercer y cuarto año en la Universidad de Estudios Internacionales Kanda.

En nuestro trabajo de investigación partimos de la base de que el estudiante es el responsable máximo de su aprendizaje y desde el principio de la práctica, le hacemos ser consciente de su papel director. El reconocimiento de ciertos factores cognitivos como la motivación, la selección de información, su organización en la memoria, la adecuación de estrategias y la definición de objetivos, entre otros, resulta imprescindible para definir el modo de trabajo en la clase (Pellegrino, 1996; Díaz, J. M. & Rodrigo, M.J. 1989; Bransford, 1981; Brown, 1981; Burón, 1988) La crítica especializada enfatiza en la concienciación del aprendiente de cada uno de estos procesos mentales y así los denomina: metamemoria, meta-atención, metacompreensión, etc, para indicar que el individuo se está observando y analizando en función de un objetivo concreto. Nosotros además, concedemos especial atención a la interacción entre todos los participantes en el acto cognitivo y

añadimos un elemento que suelo pasar por alto en la literatura especializada pero que juega un papel definitivo en el acto de aprendizaje. Nos referimos a la ignorancia de la cual el propio individuo no se percata y le hace mantenerse en un espacio irreal y confuso.

Gramática en español. ¿Por qué no? Una propuesta pedagógica para el aula

スペイン語で教える文法クラスの提案

Yoshimi Hiroyasu

Cuando hay dos profesores, uno japonés y otro nativo, que comparten clases, es normal que el profesor japonés se encargue de la gramática y el profesor nativo, de la práctica; esto parece ser un entendimiento común en la mayoría de las clases de español en Japón. Se considera que la clase de gramática la debe dar un profesor japonés porque los conceptos gramaticales que hay que explicar son tan complicados que no se podría hacer con éxito en la lengua meta.

Por otro lado, la indiscutible importancia del input en la enseñanza de lenguas extranjeras nos lleva a pensar que dar clase en la lengua meta, tanto profesores japoneses como nativos, es, y será aún más en el futuro, algo fundamental. La explicación detallada de la gramática no puede seguir siendo obstáculo para ese fin.

Esta ponencia es una propuesta de gramática pedagógica para estudiantes japoneses, cuyo único objetivo es servir para enseñar español como herramienta de comunicación. Primero hay que cuestionarse si realmente es necesaria toda la información gramatical que ofrecemos en clase. Se trataría de ser conscientes de que cada punto gramatical no tiene la misma importancia y actuar en consecuencia. Por ejemplo, es muy importante entender la relación entre el sujeto y el verbo, algo que los profesores solemos considerar obvio y sobre lo que no insistimos lo suficiente. Si intentamos explicar a la vez frases comparativas con adjetivos, con adverbios y con sustantivos, por supuesto, sería más fácil hacerlo en japonés; pero ¿realmente es necesario y beneficioso presentar todos esos usos? Se piensa que la terminología gramatical es útil, pero al mismo tiempo son palabras muy difíciles y, por tanto, mejor decirlas en japonés. Sin embargo, ¿no sería mejor pararnos a pensar si es realmente necesario usar esas palabras gramaticales? En nuestras clases muchas veces nos vemos en la necesidad de simplificar algunas explicaciones para la mayor facilidad de comprensión. ¿Qué tipo de simplificación se permite, y qué es lo que no debemos hacer?

Desde hace varios años he venido usando unos esquemas gramaticales muy simples para explicar las frases que se aprenden en clases de segunda lengua extranjera. Estas explicaciones las doy usando solo el español desde la primera clase de principiantes. En mi ponencia quisiera compartir mis ideas y experiencias de impartir clases de gramática en español y qué resultados he obtenido. Al mismo tiempo, quisiera mostrar

que no es nada difícil explicar gramática en español en clase, algo que puede hacer tanto el profesor nativo como el japonés.

L3としてのスペイン語学習意欲推移における英語学習経験の影響**La influencia de la experiencia del aprendizaje de inglés
en el proceso de motivación del español como L3.**

横山友里 (Yuri YOKOYAMA)

第二言語習得研究の歴史の中で、他言語による学習言語(L2)への影響は、古くから文法面における母語(L1)の干渉、転移という側面から研究されてきた(Slinker, 1972; Odlin, 1988; Jarvis and Pavlenko, 2008 など)。特にL1とL2の言語特徴を比較、対照して、負の転移を分析する研究が見られる。これらは、学習者の中に内在する他の言語が学習言語(L2)へ何らかの影響を及ぼすことを示しているといえる。

また近年では、L1とL2の対照だけでなく、L3学習におけるL2の影響も注目されている(Cenoz, Hufeisen, and Jessner, 2001 など)。本発表は、これらを踏まえて日本におけるスペイン語学習は、大部分の場合が英語の学習を経て行われることに着目、スペイン語をL3として定義し、学習者のL2英語への関心、態度、経験がどのようにL3スペイン語学習に影響を及ぼしているのかという点から考察する。特に、スペイン語学習の意欲向上・低下に英語の経験がどのような影響を及ぼしているのかを考察する。

予備分析では、学習者の授業毎のコメントの質的分析を行った。新しい言語を学習するという目新しさから、多くの学習者は学習開始時には過去の英語学習の影響を心理的には受けておらず、学習の初期の段階においては、英語とスペイン語の比較を頻繁に行うことが分かっている。また、英語のネガティブな経験を持つ学習者は、スペイン語学習においても同様にネガティブな経験をした場合、容易に学習意欲が低下することも示されている。

本発表では、予備分析の示唆をさらに進め、L2の動機付けに関するどの要因がL3の学習意欲向上・減退につながるのかを考察するため、スペイン語学習開始時に行った英語への①動機づけ、②理想自己、③義務的自己、④英語学習に対する態度、⑤文化に関する興味、⑥目標言語のコミュニティーに対する態度、⑦道具的—接近、⑧道具的—回避の8項目についての質問紙(Taguchi, Magid and Papi, 2009)の結果と学習意欲の推移を各授業の学習意欲自己評価とコメントの関連性から分析、考察する。これらのデータは、L2学習経験が多岐にわたる変化を学習意欲推移に与えることを示唆しており、学習意欲のプロセス複雑性の諸相とその複雑性を構成する各パラメーターの可能性についても論じる。

Gramática y comunicación: una pareja evaluable - una evaluación bien avenida
Taller de reflexión sobre cómo crear puentes entre lo gramatical y lo comunicativo
文法とコミュニケーションの橋渡しを評価から考察する (ワークショップ)

Kazuko TAKAGI

Concha MORENO

Resumen

Una de las preocupaciones del profesorado de lenguas en general y de ELE en particular es la mejor forma de evaluar. Su especial relevancia ha quedado patente en el documento publicado por el Instituto Cervantes en 2012 cuyo título es *Las competencias clave del profesorado de lenguas segundas y extranjeras*. En él se habla explícitamente de que una de esas competencias clave es la de saber evaluar. Por esa razón, en el LXI Congreso de Hispanistas realizamos un taller para reflexionar sobre el impacto de dicho documento en el mundo de ELE en Japón. Sin embargo, las preguntas como “¿qué estoy evaluando?” o “por qué estoy evaluando así?” siguen siendo una cuestión difícil de responder. En la práctica, a menudo, seguimos evaluando contenidos presentados en los manuales sin atender al proceso o sin comprobar si se han alcanzado los objetivos planteados al inicio del curso, al menos, en la mayoría de los casos. Sobre todo, si nos centramos en la situación concreta del ELE en Japón, y dado que las clases se dividen en gramática y conversación /comunicación, lo habitual es hacer exámenes separados y evaluar el resultado de las competencias por separado. Como consecuencia, pensamos que con este sistema no estamos evaluando realmente la competencia unificada del alumnado. Además, esta división implica que el proceso también ha ido por separado. Este fenómeno nos lleva, en casos extremos, a una separación total de las tareas docentes entre profesores nativos y profesores japoneses (Yonekawa, 2015). En nuestra opinión, esto representa una contradicción de base puesto que la meta de la enseñanza/aprendizaje de cualquier lengua es lograr personas capaces de hacer algo –sea leer, escribir, hablar– con los conocimientos adquiridos /presentados en las clases. Esta integración, en la que la gramática es el cañamazo del bordado final o producción del alumnado, viene de antiguo (Moreno, 1998 y 2005). Y se ha mantenido hasta el presente, como lo prueba la comunicación presentada en este mismo congreso (Moreno, 2016). En esta ocasión queremos compartir la forma en que hemos trabajado de manera conjunta y el tipo de examen final de semestre que elaboramos ateniéndonos a la coherencia entre los objetivos presentados en nuestro

syllabus, el proceso de la enseñanza y el tipo de evaluación. Asimismo, compartiremos las respuestas de nuestro alumnado a una serie de preguntas relativas a su experiencia de aprendizaje. La metodología de investigación es acción-reflexión a través de nuestro cuaderno conjunto de clase, además del análisis de las respuestas recogidas del cuestionario de los estudiantes. El período de observación ha sido el comprendido entre la elaboración del syllabus y el análisis cualitativo de las opiniones de los estudiantes. En nuestro taller pretendemos reflexionar con los participantes sobre cómo podríamos unificar los contenidos y la forma de trabajo de las clases denominadas de gramática y conversación con el fin de intentar alcanzar una vía de actuación que no suponga excesivas alteraciones en el diseño curricular actual, pero que sí se vaya adecuando a las exigencias de un alumnado que necesita ser cada vez más competente en la lengua que estudia y pase de ser espectador a ser actor de su aprendizaje.

Referencias

Moreno García, C. (2005): Gramática para el profesorado; gramática para el aula: gramática para mejorar la competencia comunicativa, en *Actas del XV Congreso Internacional de ASELE*, Sevilla 2005. Universidad de Sevilla. Servicio de publicaciones. ISBN. 84-472-08826-2. pp.599-612.

http://cvc.cervantes.es/ensenanza/biblioteca_ele/asele/pdf/15/15_0597.pdf

Yonekawa Takagi, K (2015): ¿Qué miro yo que ellos no ven? O ¿qué no miro yo que ellos ven? Invitación a una reflexión colectiva sobre las ventajas de los profesores nativos y las de los no nativos de la lengua española en la evaluación de la expresión oral de los alumnos. en *Actas del XXVI Congreso Internacional de ASELE*, La formación y competencias del profesorado de ELE

Granada 2015

http://cvc.cervantes.es/ensenanza/biblioteca_ele/asele/asele_xxvi.htm

記憶の詩学—アリストイデス・バルガスの劇作品をめぐって—

Poética de la memoria —las primeras obras teatrales de Arístides Vargas—

仮屋浩子 (Hiroko KARIYA)

アルゼンチン出身で、現在はエクアドルを拠点に演劇活動を行っているアリストイデス・バルガスは、70年代末に様々な国籍の演劇人達と演劇グループ *Malayerba* を首都キトに創設する。80年代はヨーロッパ、そしてスペインの著名な劇作家(ブレヒト、ダリオ・フォー、バリエ・イン克蘭、ロルカ等)の作品の上演に専念するが、90年代になると、劇団のために自ら作品を書き下ろすようになる。すると、彼の作品はエクアドル国内のみならず、ラテンアメリカやスペイン、米国でも上演されるようになり、現在バルガスはラテンアメリカを代表する劇作家のひとりとして知られ、祖国アルゼンチンでは彼の劇作品の上演を目的とした“*El rayo infinito de la memoria*”演劇祭が開催されるまでになった。

70年代アルゼンチンの「汚い戦争」で命が脅かされ祖国を離れたバルガスは、劇作は自らのトラウマや体験が元になっていると述べている。中でも重要なのは「記憶」である。現在にいたるまでバルガスは作品の内容を変えながら、変奏曲であるかのように「記憶」を編みこんでいく。

本発表では、90年代に発表され、現在まで上演され続けている、初期の三作品『プラムの時代』、『オクトパス・ガーデン』、『雲の上の聖母』を取り上げる。記憶に関わる台詞は単に彼の個人的な記憶の表出にとどまらず、ジェンダー、貧困、国家論、移民問題などにも波及しているため、作品は普遍的価値を有するようになる。そのような台詞を構成する暗喩、直喩、言葉遊び、イメージの連鎖などの考察から、バルガスの劇作の詩学の一端を明らかにしてみたい。

10月8日(日)【文学】

domingo, 8 de octubre 【Literatura】

演劇の社会学 —ユヤチュカニ劇団の作品をめぐって

Sociología del teatro. En torno a las obras del Teatro Yuyachkani de Perú

吉川恵美子 (Emiko YOSHIKAWA)

ペルーのユヤチュカニ劇団は 1971 年の創設以来、ペルーの多様な文化を発掘し、演劇の社会的使命を追及する演劇活動をおこなってきた。劇団名 Yuyachkani はケチュア語で「私は考えている、私は思い出している」を意味するが、忘却に押し込められてはならないペルーの歴史を「思い出し」、再評価し、新たな視点からとらえ直す試みを続けている。演劇は全ての人に開かれたアートであると劇団は考える。このため、彼らは農村部や都市の周縁部を巡り、歴史の表舞台から退けられた人々に作品を届け、社会のあるべき姿を共に「考える」。同劇団の中で中心的な役割を担う女優アナ・コレアが本年 11 月に来日公演を行う予定である。上演が予定されている『ロサ・クチージョ』の作品分析を中心に、劇団の創設者であるミゲル・ルビオの演劇観を考察しつつ、彼らの考える演劇の社会的な意義とは何かを考えてみたい。

El Grupo Teatral Yuyachkani fue fundado en 1971 en Lima, Perú. Ha venido desarrollando una actividad enfocada en la revalorización de la diversidad cultural del país y en la persecución del rol social que tiene el arte teatral. "Yuyachkani" es palabra quechua que significa "estoy pensando, estoy recordado". Así, el grupo "recuerda" las escenas históricas que no se debe olvidar, las revaloriza y las revisa. El grupo piensa que el arte tiene su puerta abierta a todo el pueblo en general. Así, busca su público entre los pueblos andinos y en las zonas marginales de las grandes urbes. Les lleva sus obras para "pensar" junto a ellos cómo se debe construir una sociedad ideal. En noviembre de este año está programada la llegada de Ana Correa, una de las actrices principales del grupo, a Japón. En la ponencia hablaré centrando en su obra *Rosa Cuchillo*, intentaré analizar la metodología del grupo formada por el fundador y director del grupo Miguel Rubio y el imagen del teatro social ideado por el grupo.

バスク語文学のスペイン語訳——その諸相と近年の傾向

**La literatura en lengua vasca traducida al castellano:
sus aspectos y tendencias actuales**

金子奈美 (Nami KANEKO)

2012年、バスク語文学作品の翻訳に関する情報を集約したデータベースがオンラインで公開され (<http://www.ehu.eus/ehg/eli/>)、これによって、過去に行われたバスク語文学の他の言語への翻訳の全容が初めて明らかになった。こうした研究の背後には、1980年代以降、特にベルナルド・アチャガ『オババコアク』のスペイン国民小説賞の受賞(1989年)をきっかけに、それまで皆無に等しかったバスク語文学作品の翻訳・紹介が活発化したこと、また、バスク語のような少数言語の文学にとって、翻訳を通じて外部からの認知と評価を得ることは、その可視性と存続に直結したきわめて重要な問題であると認識する、バスク語文化関係者が寄せる強い関心とがある。

本発表は、上述のデータベース及びそこにはまだ反映されていない近年の事例を参照しながら、今や約40言語に訳されているというバスク語文学作品の翻訳の半数近くを占めるスペイン語訳の状況を概観し、その特徴について考察することを目的とする。少数言語であるバスク語を解する読者層がきわめて限られているためだけでなく、今日のバスク語文学がスペイン側のバスク自治州を中心として制度化され、スペイン語およびスペイン文学に対して構造的な従属関係にあるという状況において、スペイン語訳は、国際的な文学市場ならびにアカデミズムにおいて事実上、バスク語原書の代替テキストとして機能している。しかし、そのテキストが「翻訳」としてどのような特徴を備えているかという点は、スペイン語を介してバスク語文学を受容する側から必ずしも注目されてこなかった。その翻訳は誰によって、いかなるプロセスを経て行われ、どのようにして出版されているのか、どんな作品が訳されているのかという基本的な点を確認しながら、起点文化のバイリンガル性、作者の関与の度合いといった要素が翻訳に与える影響について分析を試みる。

ラファエル・アルベルティの『天使たちについて』とフェデリコ・ガルシア・ロルカの『ニューヨークにおける詩人』をめぐって—転換点をむかえた二人の詩人—
En torno a *Sobre los ángeles* de Rafael Alberti y *Poeta en Nueva York* de Federico García Lorca: el momento de cambios de los dos poetas

川添誠 (Makoto KAWAZOE)

ラファエル・アルベルティ (Rafael Alberti, 1902-1999) とフェデリコ・ガルシア・ロルカ (Federico García Lorca, 1898-1936) は共に 27 年世代 (la generación del 27) に属すとされ、1920 年代にはそれぞれ、ヨーロッパへ目を向けつつ、スペインに存在する数多くの詩や歌の伝統を独自に解釈しながら、多くの詩を執筆した。ヒメネス・ゴメス (Hilario Jiménez Gómez) は、アルベルティに関する書簡をこれまでのガルシア・ロルカに関する研究を補完する形で、両者の出会いから離反に至るまでの展開を詳細に論じ、アルベルティの『天使たちについて』 *Sobre los ángeles* とガルシア・ロルカの『ニューヨークにおける詩人』 *Poeta en Nueva York* が執筆された時期に、両詩人が共に転換点となる時期を迎えていたことを明らかにしている。両作品はこれまでに、シュルレアリスム (surréalisme) 的要素をめぐってしばしば比較検討されてきたが、安易にこの用語を適応することに関する問題点も同時に指摘されている。

21 世紀に入り、シュルレアリスムに関して、その解釈及び時代への位置付けは変化しており、特にフランスにおけるものについては、鈴木雅雄が、「失敗」した言語行為を抹消せずに見つめ続ける態度をシュルレアリストたちが出発点としていたとし、最終的には文学の問題に属さないものと結論付けている。一方で、ハヴァード (Robert Havard) は、宗教によって生じることになった非合理性 (irrationality) と超越性 (transcendence) をスペインにおけるシュルレアリスムの特異性とし、あくまでも文学の枠内で論じている。ガルシア・ロルカとアルベルティは、自らをシュルレアリストであると標榜しなかったという点で共通しており、この点について、両者における伝統がどのような位置付けであったのかという点に今一度考慮する必要があるように思われる。

本稿では、従来、シュルレアリスムの要素が見られるとして十把一絡げにされる傾向にあった両作品について、伝統という視点から改めて検討して、両詩人の転換点がいかなるものであったのかを明らかにする。

Análisis de la influencia cultural Japonesa dentro de la política exterior a través de las artes marciales en el programa de voluntariado de JICA: Caso Kendo en Ecuador

**JICA の武道協力プログラムの観点から見た日本の外交政策による文化の影響
—エクアドルにおける剣道の事例分析**

Tanya GÓMEZ

Resumen:

En este estudio, a través del neorrealismo se analizará el interés político de Japón y sus efectos en la cooperación. Además desde la teoría de transculturalismo se estudiarán los factores que influyen los intercambios entre culturas. Se utilizan estas dos teorías para analizar el conflicto en un programa de cooperación en artes marciales desde la perspectiva cultural y los intereses de cada parte. A través del caso de Kendo en Ecuador (2008-2012), es posible describir el comportamiento general de los participantes de culturas diversas.

Objetivo:

Analizar la influencia cultural japonesa en los miembros de la Asociación Ecuatoriana de kendo a través de los voluntarios japoneses que participaron en programas de cooperación internacional.

Metodología:

1. Se realiza investigación descriptiva para detallar información teórica sobre política exterior, influencia cultural y cooperación internacional. Esta información se obtuvo de libros, artículos académicos, reportes oficiales de instituciones internacionales como los Ministerios Internacionales en ambos países, JICA (Agencia de Cooperación Internacional del Japón), SETECI (Secretaría Nacional de Cooperación Técnica en Ecuador), la Embajada de Japón en Ecuador, etc. Además la información de las teorías se obtuvo de los investigadores especializados en esta área.
2. Debido a que se realiza un estudio cultural, fue necesario contactar a los participantes involucrados de ambos países. Se realizaron encuestas al 90% de los voluntarios de Kendo de JICA y entrevistas a los miembros a la cabeza de la Asociación Ecuatoriana de Kendo. De esta manera fue posible describir el comportamiento general de los participantes del programa, especialmente sus comportamientos culturales.

Conclusiones:

1. La difusión cultural es parte del poder político en la política exterior japonesa utilizada en la cooperación internacional para el desarrollo; sin embargo, el poder político no

permite que se alineen los objetivos de las políticas de JICA con las necesidades de Ecuador para el desarrollo.

2. Se entiende que la falta de comprensión cultural puede afectar los programas de cooperación internacional como en el caso de kendo en Ecuador. La falta de migrantes japoneses hacia Ecuador podría ser la mayor causa de la falta de cooperación y barreras en la comprensión cultural.

3. Las políticas de difusión cultural japonesa en Ecuador son eficientes para crear eventos relacionados con arte moderno japonés y para la promoción de artes marciales. Adicionalmente, el kendo puede contribuir al desarrollo humano y por ende satisfacer las necesidades de los habitantes ecuatorianos, mejorando las capacidades individuales para crear oportunidades sociales. En efecto, el transculturalismo en kendo promueve cambios en actitudes individuales que aportan a la cooperación en el programa.

4. El kendo es el factor común que supera las barreras en el intercambio cultural. Sin embargo, fuera de Japón es difícil encontrar una definición o categorización de kendo.

Palabras clave: voluntarios JICA, Asociación Ecuatoriana de Kendo, influencia cultural, política exterior japonesa, comprensión cultural

Reformas en las políticas de Educación Bilingüe en Bolivia

ボリビアにおけるバイリンガル教育政策の改革

Francisco Oswaldo ALFARO PÉREZ

A través de los años, en Bolivia se han desarrollado numerosas iniciativas y esfuerzos orientados a la aplicación de nuevos enfoques que respondan a la realidad lingüística y cultural en el campo educativo.

Es evidente que en países plurilingües y multiculturales con una considerable presencia indígena como Bolivia, México, Guatemala, Ecuador y Perú este tema se haya convertido en un reto importante y urgente.

Son muchos los Ministerios de Educación de la región que han decidido adoptar una modalidad de educación bilingüe intercultural y en este contexto regional, Bolivia tiene singular importancia por las experiencias puntuales conducidas a nivel del sistema educativo formal.

Así mismo es importante mencionar que el proceso de implementación de políticas educativas en este ámbito no ha sido estático y ha sufrido cambios a lo largo de los últimos años. Algunos de estos cambios han sido drásticos y radicales, el primero es el cambio en la legislación educativa que modifica los términos para llamar la educación bilingüe.

En la anterior legislación “Ley 1565 de Reforma Educativa” aprobada en el año de 1994, en el título I, “Bases de la Educación Boliviana”, en el artículo 1, inciso 5 dice literalmente: “Es intercultural y bilingüe porque asume la heterogeneidad socio cultural del país en un ambiente de respeto entre todos los bolivianos, hombres y mujeres”.

Mientras que en la actual legislación, Ley 070, “Ley de la Educación Avelino Siñani – Lizardo Pérez” aprobada en el año 2010, establece en el Título I, Artículo 2, Inciso h que la educación “Es intracultural, intercultural y plurilingüe porque articula un Sistema Educativo Plurinacional desde el potenciamiento de los saberes, conocimientos y la lengua propia de las naciones y pueblos indígena originario campesinos, las comunidades interculturales y afro bolivianas, promoviendo la interrelación y convivencia en igualdad de oportunidades para todos, a través de la valoración y respeto recíproco entre culturas”.

El segundo cambio radica en la reestructuración del Ministerio de Educación lo cual repercute directamente en la implementación de las políticas educativas a nivel de aula y el tercero pero no menos importante, cambios en la normativa para la participación de la cooperación internacional en el campo educativo.

Evolución del cine andaluz desde la Transición hasta la actualidad.

アンダルシア映画の発展・民主化から現在まで

Francisco Javier LÓPEZ RODRÍGUEZ

Durante la dictadura de Franco se impuso un modelo de producción cinematográfica centralista y pretendidamente homogénea que marginalizaba cualquier intento de producir películas específicamente regionales. La transición a la democracia trajo consigo la libertad de expresión y en aquel periodo comunidades con una fuerte orientación independentista, tales como Cataluña o el País Vasco, demostraron su interés en realizar un cine autónomo que sirviera para consolidar su identidad regional. En otras comunidades, como Andalucía, también apareció un cine propio a pesar de que no tuvo el éxito comercial y crítico o el impacto sociocultural de los cines catalanes y vascos. Así pues, esta presentación tiene como objetivo reflexionar sobre el concepto de “cine andaluz” y caracterizar las distintas etapas por las que ha pasado este cine regional durante las últimas décadas.

En primer lugar se discutirán diversas definiciones de “cine andaluz” para determinar qué rasgos (procedencia de autores y empresas productoras, localizaciones, temáticas, y estéticas) se utilizan para delimitar este concepto. A continuación se realizará un recorrido por la historia del cine andaluz con el fin de identificar las principales etapas, las cuales están marcadas por el uso político, social y cultural que se hace de los rasgos culturales andaluces. En este sentido, podemos distinguir diversas fases tales como: “la andaluzada”, que vendría a ser la imagen estereotípica de lo andaluz vinculada al baile, a la comedia, a la fiesta y a lo folclórico que se impone en las españoladas desde los años 30 hasta los años 60; la reivindicación culturalista propiciada por la Transición en la que se desarrolla un cine andaluz que pretende contrarrestar la imagen falseada que el cine español ha venido ofreciendo de la cultura andaluza y en la que se critican aspectos característicos de la región como el caciquismo o la religión al tiempo que se adaptan obras literarias de autores andaluces; la vertiente populista, que busca ahondar en la idiosincrasia de las clases populares de Andalucía con el fin de mostrar sus condiciones de vida, los problemas sociales a los que se enfrentan, o el humor característico de la región en obras cinematográficas que a veces se acercan peligrosamente al auto-estereotipo debido a su proximidad a los tópicos de la españolada; y, por último y en una línea paralela, se aprecia también una vocación global en una serie de obras que, habiendo sido creadas por

cineastas andaluces y rodadas en la región, abordan temas universales o utilizan modelos fílmicos ampliamente reconocibles debido a la influencia del estadounidense. Ello conlleva, por su parte, una mayor variedad de géneros, que van desde el terror al cine fantástico, y la posibilidad de una difusión internacional más amplia gracias a la tecnología digital.

Durante la presentación se ejemplificarán estas etapas con varias películas andaluzas que serán brevemente analizadas con el fin de mostrar los principales rasgos de la producción cinematográfica de Andalucía.

Palabras clave: historia del cine, cine, Andalucía, cine andaluz, cultura.

地中海古代神話と聖母マリア崇拝からアルモドバル映画の女性表象を読み解く
Análisis de las representaciones de las películas de Almodóvar desde el punto de vista de la mitología antigua de Mediterráneo y del Marianismo.

矢田陽子 (Yoko YADA)

世界的にアルモドバルの名が認知される前の八十年代から、ペドロ・アルモドバルは現代スペイン社会を生き抜く女性の表象と彼女らを取り巻く社会問題の表象をライフワークとしてきた。米国や英国などの英語圏では、その女性表象を北米や英国で形成された映画ジェンダー理論の観点から分析・考察する研究が進められてきたが、現在では新しい見解が提示されることのない飽和状態ともいえる。

そこで今回発表する研究では、アルモドバルの女性表象を次の二つの観点から分析していく。第一の観点は、古代神話で伝えられる地中海文化圏に存在した女権社会を司ったとされる「大いなる女神 グレート マザー」の存在とその影響である。そして第二に、カトリック教会が「信仰」としては認知していないものの、実際にはスペインを中心に地中海沿岸のカトリック文化圏に存在する聖母マリアを崇める「聖母マリア信仰」であり、これらが現代スペインにも顕在しつづける精神性やジェンダー役割における固定概念に如何に影響を与えてきたのかという観点である。

これらの観点をもとに、アルモドバルが自身の作品、特に、「*Todo sobre mi madre*」、*「Volver」*、*「Julieta」* で描く現代スペイン社会に生きる女性の姿やその言語表象には、この二つの観点到合致する要素が存在するのか否かを精査し、アルモドバルが娯楽作品でありながらも真に伝えようとした点は難なのかを考察していく。

尚、この研究発表は、平成二十九年度科学研究費助成費(奨励研究)の研究課題(研究代表者矢田陽子)であり、日本学術振興会に研究実施計画として提出済みのものである。